

アセスメントにおける心理的能力・自我機能の 概念の再検討

中京大学心理学部 神谷 栄治

A review of "psychological capacities" and "ego function" in personality assessment

KAMIYA, Eiji (School of Psychology, Chukyo University)

This thesis reviews the concept of psychological function in personality assessment. The "ego function" concept in previous psychological research contains several ego functions. In contrast, Peebles described five core "psychological capacities": reality testing, reasoning, emotional regulation, relationship and conscience. The differences between these concepts of ego function and psychological capacities are examined.

パーソナリティ・アセスメントにおいて、精神分析の影響、なかでも自我心理学の影響を受けている研究者は、心的機能をいくつかの構成要素に分けてとらえ、その機能的要素の発達と障害の程度を把握しようとしてきた。たとえば、現実検討機能や対象関係機能は、そうした心的機能の代表的なもので、こうした機能は、精神分析では、自我機能あるいは単純に自我と呼ばれてきた。

だが、自我機能という概念によって、心的機能を、機能単位ごとに分けてとらえようとする考えについては、いくつもの批判がある。一つは、人の心的機能はそうした部分的要素に還元することではとらえられないという考えで、これはゲシュタルト心理学の立場や、人間学的立場から従来から批判され続けてきたものである。また別の批判もありうる。それは、こうした自我機能という概念は、必然的に精神分析的な概念や前提を内包しており、精神分析の研究あるいは臨床アプローチをとらない研究者や臨床家にとっては、活用しにくいものであるというものである。さらには、精神分析家が提唱する自我機能の概念は、操作的に定義しにくく、また相互に重複した機能もあり、混乱した概念であるというものもありうる。

こうした批判には妥当な面もあるが、一方で、現実検討や対象関係という自我機能など、自我機能のなかのいくつかの機能については、多くの臨床家が精神分析志向でなくとも、広く有用なものとして活用している現実もある。つまり自我機能という考え方は、臨床的な立場の違いを横断して、臨床的に有用であることもまた事実である。

近年、精神分析的な視点に立ちながらも、幅広い臨床的パラダイムを視野にいたした立場から、自我機能という考え方にかわって、「心理的能力」(psychological capacities)という概念が提唱された(Peebles, 2002)。これを提唱したPeeblesによると、この心理的能力は、精神分析的な立場以外でも臨床的に有効に利用でき、心理療法の最初期、とりわけ治療同盟の形成や発展に大きく貢献するというものである。

そこで、本小論では、従来の主な研究者の自我機能の考え方と、このPeeblesの心理的能力の概念を比較し、こうした概念が現在の心理臨床活動にどのように役立つ可能性があり、そして限界や留意点はどんな点であるのかを検討していく。

I. 従来の代表的な自我機能の分類と その測定方法

(1) Bellakの自我機能

精神分析家Bellakは、一連の研究で、自我機能の解明や測定を追究した(1949, 1969, 1973)。Bellakは、統合失調症と神経症と健常者の自我機能を対比してとらえる試みを最終的にまとめ、そこでは12の自我機能の概念を提唱している(1973)。その項目はTable-1に示した。

ベラックはこの概念にもとづいて、自我機能の評定法を考案し、実際に評定をおこなっている。それは、面接や実験的手続きにくわえて、ロールシャハ法やTATなど複数の心理検査を利用するものである。こうした試みは包括的に自我をとらえようと

Table-1 Bellak の12の自我機能

1. 現実検討
2. 判断
3. 外界と自己の現実感覚
4. 欲動・感情・衝動の制御と統制
5. 対象関係
6. 思考活動
7. 自我による自我のための適応的退行
8. 防衛機能
9. 刺激障壁
10. 自律的機能
11. 総合-統合機能
12. 克服力-有能感機能

Table-2 Weiner の6つの自我機能とロールシャッハ法での主な指標

1. 思考活動	A. 焦点化 ; Dr, 図と地の混乱
	B. 合理性形成 ; 作話, 混交反応
	C. 概念形成 ; 特異な象徴化, 抽象化
2. 現実との関係	A. 現実検討 ; F+, R+, P 反応・人物描画法
	B. 現実感覚 ; Wr, Dr
3. 対象関係	; M, H
4. 防衛操作	; Sex, At, カラーショック, カラー優位性
5. 自律機能	; 反応産出における精神運動速度
6. 統合機能	; Zスコア, DLスコア, RPRS

Table-3 馬場の6つの自我機能

1. 現実機能
2. 防衛機能
3. 適応機能
4. 対象関係
5. 自律機能
6. 統合機能

Table-4 Peebles の5つの心理的能力

1. 現実検討
2. 思考活動
3. 感情調整
4. 対人関係
5. 良心性

したもので、意欲的な試みとして評価できる。しかし、一方、いくつもの実験や検査をクライアントに実施することは、心理的負担を課すことになり、また医療経済的な観点からも現在は、こうした評定法を用いることはかなり困難である。

(2) Weiner の自我機能

臨床心理学者である Weiner は、統合失調症の病理をらえるには自我機能の観点が重要であると認識し、Bellak とはやや異なった観点から自我機能をとらえる方法を試みている (Weiner, 1966)。Weiner は、Bellak とは違い、6つの自我機能を取り上げ、そしてそれらをロールシャッハ法、ウェクスラー式知能検査、人物描画法 (DAP) でとらえる方法を示した。Table-2 に Weiner の提唱した自我機能と、心理検査におけるその主な指標を示した。

(3) 馬場の自我機能

自我心理学の立場に立つ精神分析家である馬場は、一連の著書のなかで、自我機能について述べ、それをロールシャッハ法でどうとらえられるか考察している (小此木・馬場, 1972; 馬場, 1997; 1999; 2008)。馬場は、Bellak・Weiner とは違い、統合失調症を主たる臨床対象とするのではなく、境界例 (パーソナリティ障害)・神経症などをも含め幅広い臨床群を対象として論考していることが特色と考えられる。さらに、ロールシャッハ法を主な測定方法として使い、ロールシャッハ法の数的指標よりも、反応プロトコルの継起を総合的に利用している点も特色である。馬場が、最終的に重要な自我機能として抽出しているのは6つの自我機能である (Table-3 参照) (馬場, 2008)。馬場の一連の自我機能の考え方とその把握方法は、緻密で優れた論考であるものの、精

神分析的概念に厳密に立脚しているために、異なる立場の臨床家には利用が難しいという面がある。

II. Peebles の心理的能力の概念

Peebles は、精神分析家であると同時にバイオフィードバックや催眠法など幅広い臨床的アプローチを視野にとらえている臨床心理学者であるが、そのPeeblesは著書で、心的機能を示す概念として「心理的能力」という概念を提唱している (Peebles, 2002; なお以下のPeeblesについて言及箇所はすべて同書からの引用である)。Peeblesによれば、従来使われてきた自我機能という名称を採用しなかったのは、精神分析以外の文脈でも理解しやすく活用できるようにだという。Peeblesの心理的能力の概念はTable-4に示した。つぎにその能力をそれぞれ概観していく。

(1) 現実検討

現実検討は、Bellak や Weiner そして馬場のいずれもが自我機能として取り上げているもので、それだけに重要な機能であることは間違いないものである。Peeblesによると、現実検討とは、人や出来事を大幅に歪曲することなく、認識できる能力である。現実検討が優れている場合には、鋭敏な認知的識別力があり、この能力が重篤な障害をきたしている場合は、幻覚などがあげられるという。この現実検討の機能水準についてはTable-5に示した。臨床

Table-5 現実検討：機能性の水準

高 度	標 準 的	軽度の障害	中度の障害 (境界水準)	重度の障害 (精神病水準)
認知は、正確で、識別力があり、細部から全体像へと柔軟に視点を移行できる	正確で妥当な認知 通常は葛藤領域においてのみ、認知的色付けが生じる：たい	認知的色付けや認知的誇張がある 認知的歪曲は特定の状況的文脈の時だけ起きる	現実検討の障害は必ずしも常にあるわけではない 感情・親密さ・曖昧さの程度や扱う内容によって、現実検討の水準は的確な認識から深刻な歪曲まで変動する	認知的歪曲と変容：歪曲が著しいため、たいてい人は患者の認知を、追体験できないか、理解するのにかなりの努力を要する：幻聴や幻視など
類似性と相違点を素早く認識できる	たいの場合、言葉に出す前に認知のひずみに気づき自己修正できる	状況的文脈が元に戻れば、現実検討も回復する		
パターン認識が容易にできる		気づかれにくい微妙にゆがんだ認知と、ある特定の葛藤領域における認知的盲点という軽度の障害が含まれる	実際に存在する物事を歪曲する（存在しないものを知覚するのではない）	根底にある象徴的なコミュニケーションに耳を傾けることは有用
問題が生じた時や他の心理能力が低下している時に、現実検討能力の高さがよりどころとなる	認知において主観性があることを許容できる 認知の修正は可能 多くの場合、観察力があり学習力や解釈力も十分ある	ユーモアや対人状況、本からの知識、個人的経験などで認知のゆがみは修正される可能性がある	治療同盟の破綻を引き起こすような現実検討の変動を和らげるための薬物療法が有効な場合もある	
		安全と同盟を危うくするほど現実検討が逸脱することはめったにない 認知のゆがみについての疑問を、受け入れる可能性がある 共感、直面化、教育、解釈が有効な場合が多い		

的に言えば、こうした機能の重度の障害は、統合失調症など精神病的な混乱状態に見られるものである。

(2) 思考活動

思考活動は、Bellak と Weiner が自我機能として取り上げている。Peebles によると、思考活動は、状況を合理的に解釈する能力であり、この能力が優れている場合には、事実と個人的意見とが明確に区別されており、この能力に重篤な障害がある場合には、妄想的思考や奇異な論理過程が見られるという。この思考活動の機能性の水準については Table-6 に示した。臨床的には、重い思考活動の障害は、統合失調症に特異的に見られるものであり、また否定的な思考過程といった軽度の思考活動の問題は、うつ性障害に見られるものである。

(3) 感情調整

感情調整という機能は、Weiner と馬場は自我機能として取り上げていないが、Bellak は「欲動・感情・衝動の制御と統制」という名称で取り上げていた。Peebles によれば、感情調整とは、柔軟性を持ちつつ必要に応じて自制しながら、さまざまな感情を体験し表現する能力であり、優れた感情調整には、自然さや偽りのなさ、機転、周囲への配慮という特徴があり、逆にこうした能力が障害を受けている場合には、感情の爆発、制御できない衝動性そしてアレキシサイミアが見られるという。この感情調整の問題については Table-7 に示した。臨床的には、こうした能力の問題は、気分障害や、パーソナリティ障害にとくに顕著なものであろう。

Table-6 思考活動：機能性の水準

高 度	標 準 的	軽度の障害	中度の障害（境界水準）	重度の障害（精神病水準）
思考は論理的柔軟性があり、応用範囲が広く、活用できる	思考過程のかたより： ・過度の一般化 ・全か無かの思考 ・破局化思考	思考過程の錯誤： ・思考過程の錯誤は一時的ではなく広汎に存在しがち	中度の障害（境界水準） 作話： ・過度な推論 ・出来事に個人的な意味付けをする ・物事や出来事や人との間に関係念慮を抱く	統合失調圏の障害： ・自閉的論理 ・過度の象徴的思考 ・混交思考 ・思考減裂・不条理性
「粹」にとらわれない独創的思考法	・過大評価・過小評価 ・「すべき」思考 ・肯定体験の無効化	・誤った考え方に固執しがち	・物事や出来事や人との間に関係念慮を抱く	双極性障害 ・結合思考
ユーモアと創造性	思考のかたよりは広汎にわたるものでなく、ある特定のトピックや状況においてのみ生じる	ストレス状況下では、作話や自閉的倫理が一時的に生じる	・考える時にデータを十分集めず、他の選択肢となる仮説を考慮しない	非定型精神病
思考活動はコントロールされている（思考の柔軟性は意図的で、可逆的で、一過的である）		神経学的基盤を持つ広範にわたる思考過程の錯誤がある場合には、薬物療法が有用かもしれない	・ストレス状況下でのみ精神病的思考	・混交思考と特異な言語新作を除いて、いずれの思考障害も示す可能性がある
一流の、コメディアン・科学者・芸術家・コンピュータソフト開発者・刑事など	思考のかたよりによって苦痛を感じやすい		治療的介入： ・作話によってセラピスト側に喚起される否認や防衛や無関心への引力に対しては、一時的に感情的な距離をとったり、患者は傷ついているあるいは怯えていることを思い起こしたり、穏やかな探究的な反応を示したり、必要に応じて謝罪したりするなどして、耐える	・急性発症という特徴がある：たとえば、感情の混乱、不安定性、急減に変動する内省力
	自分の思考過程のかたよりを検討し是正する柔軟性がある		・感情が穏やかな時に、認知療法的技法を使い、思考のゆがみを修復する	上記3つ（統合失調症、双極性障害、非定型精神病）に共通して見られる思考障害： ・言語新作 ・連合弛緩 ・音連合
	認知療法的技法が有用： たとえば、ソクラテス式質問法・思考評価ワークシート・ある考えについて賛成／反対の両面の根拠について検討・選択肢となる他の見方や考え方の創案		・過敏性や過剰反応を緩和させるに薬物療法が有効	統合失調症は奇異で独特な性質を帯びた言語新作等になりがち：双極性障害ではより児童的で軽薄な性質を帯びる
				おそらく遺伝学的基盤がある可能性がある
				激しい感情表出状況（特に否定的感情）で思考障害は悪化し、感情的な激しさが緩和されると改善する
				治療的介入 ・薬物療法 ・心理教育的介入 ・支持的介入 ・メタファーを通じたコミュニケーション

Table-7 感情調整：発達・成熟度の水準

高度から標準的	軽度の障害	中度の障害 (境界水準)	重度の障害 (精神病水準)
さまざまな調整スキルの柔軟な活用 状況に応じて感情抑制と率直な表現との使い分けが可能	安定した、基本的には適切な調整スタイル 調整スタイルが現時点では、以下の理由で症状を生じている： 柔軟性欠如 脆弱 過剰負荷 有効範囲の狭さ	感情の不安定な変動 調整スタイルに以下の特徴が見られる 易変性 感情の激しさ 衝動性 挑発 自己鎮静化の困難	内面の感情の兆候が処理能力を圧倒する 感情体験を不合理に解釈する 了解不能あるいは危険な様式で表出される感情

Table-8 対人関係能力：発達・成熟度の水準

高 度	標 準 的	軽度の障害	中度の障害	重度の障害
人とのつながりに関心を持ち続けられる 安定した愛着	優秀水準の能力の多くがあるが、ある領域では硬直性や能力不全がある	不安定な愛着 境界線感覚の脆弱性と、次にあげる独りでいられる能力の障害： 他者との強すぎる結びつき 恐怖を喚起する状況に自分から飛び込み自信を持つ 強い刺激を求める傾向	混乱した愛着 独りでいられる能力と次にあげる自己鎮静化の能力における障害： 他者についての良い体験を内在化する能力の障害 他者についての記憶の恒常性の能力の障害	人とのつながりに対する著しい嫌悪 人とのつながりに対する不合理な解釈 人とのつながりによって混乱が生じる
独りでいられる能力と、刺激や消費や薬物などに頼りすぎずに生産的・創造的であり得る能力	他者に勝つことに動機づけられた競争	優越感・劣等感のテーマのフィルターを通して他者の動機を解釈する	他者に対して両価的感情を抱く能力の障害： 自分や他者の良い面と悪い面を同時に考え合わせざるをえなくなると混乱する	
他社との健全な分化を保つ能力		対人関係での要求・感情・共感不全をめぐって自己感の統合の混乱が生じる(偽りの自己の現象など)	他者との情緒的交流は自分の体験の投影になっている	
人に対して両価的感情を抱いていられる能力		脆弱な自尊感情：成功や挫折で引き起こされる自尊感情の極端な上下動の安定化の困難	まとまりを欠いた自己感： 自己感の統合性は著しく変動する	
他者の情緒的ニーズに波長を合わせて情緒的交流できる能力				
相互的な交流をもつ能力				
統合性とまとまりのある自己感				
柔軟性と回復力のある自尊感情： 喪失や挫折や成功などの体験を受けとめ、そこから学べる能力				
対人関係において攻撃性・自己主張を適度に示す能力 自己の最善をつくすことに動機づけられた競争		自尊心を保つために、優越性を獲得することに動機づけられた競争		

Table-9 良心性：発達・成熟度の水準

高 度	標 準 的	軽度から中度の障害	重度の障害
他者および、自分の行動が他者に与える影響について、適切で生産的な気遣い 罪悪感には役に立つサインである ・罪悪感が行動を改善するサインとなる ・罪悪感が償いや修復的行動をするためのサインとなる	生産的でないいきすぎた気遣い 罪悪感にはサインとして十全に機能していない ・罪悪感がある行動を繰り返して言う言い訳や許しとして使われる ・いきすぎた自己への懲罰（と同時にいきすぎた他者批判）	調整を欠いた不安定な気遣い 過度に厳しいか過度に甘く緩い良心 ・気まぐれに変動する過剰な自己処罰 ・恥の感情が自己崩壊の原動力となる ・特別扱いを受ける特権があるという感覚 ・不適切な行動に対して一貫性のない評価や判断を下す ・権威に対して過剰に冷笑的か反抗的	他者の感情および、自分の行動が他者に与える影響についての気遣いの欠落（神経学的な基盤がある可能性がある） 他者に苦痛を負わすことに快を感じる

(4) 対人関係

対人関係という機能は、Bellak, Weiner, 馬場の3人ともが「対象関係」というラベルで取り上げている機能であり、この機能もきわめて重要なものである。Peeblesによると、他者に愛着を持ち、他者についての肯定的記憶によって安心感を得、自己評価と個人的な境界線を調節して他者と相互作用をし、そして他者と協力して物事に取り組むことができ、対人関係で生じる両価的感情などにも耐えられ、このような困難にもかかわらず他者とのつながりを維持できる能力であるという。この対人関係の能力の機能性や発達についてはTable-8に示した。臨床的にはこうした能力の障害は、パーソナリティ障害や、広汎性発達障害に顕著に見られるものである。

(5) 良心性

この良心性という機能は、Bellak, Weiner, 馬場のいずれもが自我機能としては取り上げていない機能である。従来、精神分析では、超自我として概念化されてきたもので、そのためあえて自我機能として採用する必要性がなかったためと考えられる。Peeblesによると、良心性とは、他者に気遣いを示し、罪悪感を感じ、自分の行動変化と他者への償いの指針として罪悪感を用いることができる能力であるという。この良心性の発達については、Table-9に示した。臨床的にはこうした能力の欠損は、反社会性パーソナリティや、広汎性発達障害において、目立つものであり、また、柔軟性の乏しい行き過ぎた良心性は、うつ性の障害に目立つものである。

III. Peeblesの「心理的能力」概念の臨床的観点からの比較検討

Bellak, Weiner, 馬場は、心理検査等を使って、自我機能を評定し把握する方法を提案しているものの、Peeblesは、心理検査を利用して客観的に心理的能力をとらえる方法は示していない（思考活動の把握については、共同研究者であったKleigerのロールシャッハ法を用いた方法（1999）に言及している）。Peeblesによれば、心理的能力を把握するには、来談の仕方や、面接での行動や話の流れや対話の様式、そして語られる内容によって、判断していくということである。そして実際に、面接のなかのどのような振る舞いや現象が、アセスメントの重要な指標となるのかを示している。

Peeblesの心理的能力には、Weinerと馬場の両者が自我機能として取り上げていた「防衛機能」「自律的機能」「統合機能」が取り上げられていない。これは、精神分析的な概念を避けたため、そして顕在的な行動反応の水準ではとらえがたい概念は避けたためであると考えられる。自律的機能と統合機能は、言わばさまざまな機能の上位機能（メタ機能）とも考えられるので、その他の個々の心理的能力を把握した上で総合的に判断できるものと考えられる。しかし防衛機能は、メタ機能とは考えられないので、こうした機能を含めないことはパーソナリティ把握における限界ともなりえる。防衛機能は、不安や葛藤の内的な操作対処法であり、パーソナリティ類型の捕捉において重要な視点を提供する概念である。したがって、防衛機能が含まれていないことは、パーソナリティ類型の把握が、この心理的能力の概念だ

けでは難しいこととつながると考えられる。

総合的には、Peeblesの心理的能力の概念は数が少数に絞られており、概念的にも明確であるという点で学派横断的に活用でき、時間の限られた臨床場面でも活用しやすいという利点が指摘できる。一方で、自我のある側面をとりあげないために、ある種のパーソナリティ特徴や病理については十分にとらえられない恐れもあるとも考えられる。しかし、Peeblesは、包括的なパーソナリティ・アセスメントを意図してこの概念を考案したのではなく、心理療法の初期段階における、治療のプランニングや、治療関係形成に重大な影響がある要素を見立てることを重視して考案したものである。したがって、この心理的能力の概念で、とらえきれない病理については、セラピーを通じて引き続きさらにアセスメントすることで補っていかれるべきものと考えられる。

文献

- Peebles, M.J. 2002 *Beginnings: the Art & Science of Planning Psychotherapy*. The Analytic Press.
- 馬場禮子 1997 改訂境界例—ロールシャッハテストと心理療法— 岩崎学術出版社
- 馬場禮子 1999 改訂ロールシャッハ法と精神分析— 継起分析入門— 岩崎学術出版社
- 馬場禮子 2008 精神分析的人格理論の基礎 岩崎学術出版社
- Bellak, L. 1949 A multiple-factor psychosomatic theory of schizophrenia. *Psychiatric Quarterly*, 23, 738-755
- Bellak, L., Hurvich, M. & Gediman, H. 1973 *Ego functions in Schizophrenics, Neurotics, Normals*. Wiley.
- Bellak, L. & Loeb, L. (Eds.) 1969 *The Schizophrenic Syndrome*. Wiley.
- Kleiger, J. 1999 *Disordered Thinking and the Rorschach: Theory, Research and Differential Diagnosis*. The Analytic Press. (吉村聡・小嶋嘉子他訳 思考活動の障害とロールシャッハ法 創元社 2010)
- 小此木啓吾・馬場礼子 1972 精神力動論 医学書院
- Weiner, I.B. 1966 *Psychodiagnosis in Schizophrenia*. Wiley. (秋谷たつこ・松島淑恵訳 精神分裂病の心理学 医学書院 1973)